

## 第7回北海道自転車活用等推進連携会議 議事録

### 1 開催日時

令和6年(2024年)6月7日(金) 10:00~11:20

### 2 開催場所

道立道民活動振興センター(かでの2・7)820会議室  
札幌市中央区北2条西7丁目

### 3 出席者

別紙出席者名簿のとおり

### 4 議 題

- (1)「自転車安全推進分科会」の開催状況について(報告)
- (2)第2期北海道自転車利活用推進計画の推進状況について

### 5 議 事

- (1)「自転車安全推進分科会」の開催状況について

自転車安全推進分科会の事務局(二瓶交通安全担当課長)より資料1関係(資料1-1~資料1-7)について説明後、萩原北海道大学名誉教授より、アドバイスをいただいた。

#### 【北海道大学名誉教授 萩原亨】

- 自転車利用者が増えて事故件数が変わっていないとの見方もあるが、結果を見ると、あまり減っていないのが実情だと思います。自転車事故を減らすことができる強力な対策を考えなくてはならないと思います。

今年すぐに方向性を切り替えるのは難しいと思いますが、次年度、次々年度からは、「自転車は車。車の走行を理解してもらわないと危険。」と理解してもらい、徹底するような、啓発活動や道路での指導を強めていくことが大事だと思います。

逆走の自転車を見ると、完全に歩行者だと思っている。自転車は歩行者ではない。キックボードなどが増えてくると、さらに大変なことになってしまうので、この会議に所属している方に、より強力な啓発指導を行える体制を考えていただくのは必要と感じました。

- もう一つは、自動車の制御をしようという話。皆さんも自転車で車道に乗るとわかると思うのですが、邪魔だという圧力をかけられ、自動車のドライバーさんも相当悪い。自動車も自転車と協調し、「道路を自転車と一緒に使う」意識を持たせることが望まれます。

特に、札幌圏は中学生が自転車で学校に通わないので、自転車で通学する他のまちに比べると、まち中に自転車が少ない。自動車に、もっと自転車への意識を強く持たせることが必要。

今回、法定速度が下がりそうで、画期的だと思う。中央車線が入っていない道路の法定速度を30キロにするのはすごいと思うのですが、それを守らせることが大事。ヘルメット着用と同様、間違いがあっても死亡に至らないよう、ドライバー側への制御と自転車を理解させること、まち中では速度を落とさせることが必要。

- 小学生くらいから「自転車は車と同じなのだよ」ということで、車のルールをもっと教えていく。それから、駄目な乗り方している人に直接、指導をする機会を増やすこと。両面で対策をとれば、あと2~3割は減ると思いますので、是非、そのような体制をとることができるようすべきというのが私自身の感想です。

- (2)第2期北海道自転車利活用推進計画の推進状況について

事務局(守屋地域資源活用担当課長)より資料2について説明後、萩原北海道大学名誉教授より、アドバイスをいただいた。

【北海道大学名誉教授 萩原亨】

- 令和6、7年と、是非、このような活動を継続して実施していただきたい。
- 市町村の自転車活用推進計画の策定があまり進んでいないと感じました。自転車活用推進計画の策定が進めば、より自転車にとって優しい、自転車をうまく使うライフスタイルが各地で見られるようになり、良いのかなと感じました。
- サイクルツーリズムは、かなり進んできております。特に、バス等、自転車を乗せて運んでもらえるところが整備されると、自転車が利用しやすくなるのではないかなと感じております。  
持って行く自転車もそうですが、レンタサイクルやまち中のシェアサイクルなど、「借りて使う、すぐ返す」、「お手軽に使う」のを進めてもらえると、サイクルツーリズムには非常に有効なのだと思います。
- この第2期北海道自転車利活用推進計画は、総合的に自転車の魅力の発信、安全で安心に利用できる環境の構築など、バランス良く進めていく計画だと思います。この計画をもって直接、事業を執行するわけではないので、是非、こういう計画を踏まえて、関係機関が実施をしてもらえると非常にありがたいし、ご出席の方にもご検討いただければと思います。

## 6 その他

各機関より、次のとおり、情報・話題提供があった。

【北海道開発局道路計画課道路調査官 松本一城】

- サイクルツーリズムの取組は、平成28年くらいから計画や法律の動きがあって、自転車は、食と観光のみならず、環境負荷の低減や災害時に役立つ、健康の増進に重要など、いろいろなメリットがあるので、サイクルツーリズムが盛り上がり始めた。  
北海道内のサイクルツーリズムの推進体制について、道内10ルートにルート協議会があり、ルートごとに市町村や振興局、開発建設部、民間の商工会等が入って活動しており、全道的な組織としては、連携協議会がある。  
特に、アドバイザー会議では、北見工大の高橋清先生や萩原先生など、有識者の方に入っていており、毎年、様々なアドバイスをいただいているところ。
- サイクルツーリズム推進方針は、基幹ルートと地域ルートの構成で、まず、幹をつくって枝葉的に波及させていく方針です。最近では「どうなん海道サイクルルート」が指定されたところ。
- 自転車走行環境改善としては、路面表示を付けたたり、案内シールを貼ることでルート案内をしています。  
矢羽根型の路面表示は296kmに設置済みですが、全道9万kmくらい道路あるので、まだ1%に満たない。例えば、オランダだと25%くらい走行環境が整備されているので、まだまだ整備できていない状況です。  
取組事例として、羊蹄山を一周するサイクルルートにおいて、整備前は路肩が狭かったところですが、路肩を拡げることで自転車が走りやすい環境に整備した事例があります。
- 受入環境の充実としては、レンタサイクルの実施やサイクルラックの製作のほか、除雪車を置いてある除雪ステーションを、夏場は開放して自動販売機や修理工具を置いたり、トイレ貸したり、サイクリストの休憩場所としてオアシス的に使っています。  
また、サイクルバスとして、地元の路線バス会社と連携して公共交通で移動できるようにする取組を行っています。  
今年度、サイクリスト応援カーの取組を始めたところ。一日一回、全道の国道を走る黄

色の道路のパトロールカーに修理工具をのせ、直せる職員と直せない職員がいるのですけれども、パンクや故障で困っている方がいたら工具をお貸ししています。

- 情報発信としては、サイクルルートごとに、ルートだけではなく、コンビニやトイレなど休憩施設や宿泊施設がどこにあるか、勾配がきつい坂があるとか標高などわかるよう記載したルートマップをつくっています。  
様々なPR活動として、例えば、昨年7月21日にサイクルツーリズム推進フォーラムを札幌パークホテルで実施しました。萩原先生やNPO法人花サイクルクラブの高橋副理事長、道警管理官にもご出演いただいております。
- 自動車と自転車は1.5メートル空けましょうという「シェア・ザ・ロード」の取組をしています。  
羊蹄ニセコエリアで力を入れて取組を実施しており、去年は、実験を行いました。実験内容は、自転車の横を大型車が追い抜くのですけれども、時速40キロと60キロで走ったとき、それから、1メートルと1.5メートル、2メートル空けたときでどれくらい心拍数、恐怖感が上がるかというものです。  
特に、1メートルと1.5メートルで比較すると、結構、大きな心拍数の違いが見て取れ、1.5メートル以上離れている場合は、自転車の方の恐怖心が薄くなる、より安心が高まるとの結果が出ました。
- 様々な連携企業の方々と協力した取組みですけれども、例えば、セコマグループと北海道開発局で連携協力協定を結んでおり、取組の一環で全道166店舗にサイクルラックを置かせていただいております。セコマさんは道内1,100店舗くらいなので、1割以上の店舗に、夏の間、ラックを置いていただき、費用も全部セコマさんに出していただいているところです。
- 昨年も実施したフォトコンテストですが、全道から応募のあった写真の中から50枚を選ぶ企画です。今夏もまた実施しようと思っておりますので、案ができましたら皆さんにも周知させていただきましますし、是非、走られた際には映える写真を撮っていただければと思います。
- ナショナルサイクルルート、全国の中でも、特に、取組が進んでいる6カ所について、ご紹介させていただきます。全国に6ルートあって、道内はトカプチ400。私は、ビワイチ、しまなみ海道、富山湾岸は行ったことがありまして、つくばと太平洋岸はまだ行ったことがないです。  
中でもしまなみ海道は受入環境がすごく、所々にレンタサイクルがあり、サイクルラックはどこのお店に寄っても置いてある状況です。矢羽根もすべての沿線、道路に引いてあって、迷うことがなかったですし、島と島の間を渡るので一回上って、橋を渡って、また降りるといのはちょっときつかったかなという感じでした。
- 北海道のトカプチ400は、帯広を起点にして8の字に回るようなルートで、全部回ると400kmあるということで「トカプチ400」の呼称となっております。一番上の三国峠からダウンしてくるルートや、下の方へ行くと平坦な土地で初心者の方でも走りやすいルートもある。  
道内10ルートで、特に、トカプチ400で優れているのが、共通のロゴマークがいろいろな所へ行っても見ることができること。案内板にトカプチ400のロゴや「NCR」をPRして、協力施設の道の駅や宿泊施設にもロゴマークを置いていて、エリア内どこへ行ってもトカプチ400、「NCR」がわかるようになっているのが、他のルートよりも評価しているところ。  
また、休憩施設のラック、空気入れ等も他のエリアよりは充実しており、借りることができる。  
ゲートウェイの整備では、例えば、高速道路のインターチェンジ降りた所に道の駅おと

ふけ、JR 帯広駅や帯広空港でも、PR 等しています。ナショナルサイクルルートなので、ルートマップも日本語だけではなく、英語など外国語でも作るようにしており、取組が進んでいると感じております。

- 道内の自転車活用推進計画は、策定するメリットとして、交付金の重点配分がありますので、つくっていただくように我々もいろいろなところで PR していきたいと思っております。

【北海道警察本部交通企画課管理官 藤原学】

- 5月17日、道路交通法の一部改正法案が国会で可決されました。自転車等の交通事故防止のための規定の整備について、概要を説明させていただきます。

資料4で添付しておりますけれども、こちらは警察庁の公表資料でして、現時点、私が把握している内容もこの資料の域を出ないところです。

- 大きく三点ございまして、一つ目「携帯電話使用等及び酒気帯び運転の禁止」。  
まず、自転車の運転中に携帯電話使用等に起因する交通事故は増加傾向にあるということと、自転車を酒気帯び状態で運転したときの死亡重傷事故率が高いことに鑑み、携帯電話等の使用については、これまでは、道交法での禁止行為ではなく、各都道府県の公安委員会規則で禁止されていたものでありますけれども、これを道交法での禁止行為に格上げし、罰則を科すといった内容です。  
また、酒気帯び運転については、新たに道交法において罰則規程を整備することによって交通事故抑止を図るということです。これまでも、当然、自転車は車両ですので、体内にアルコールを保有して運転することはできないのですけれども、これまでは、体内にアルコールを保有し、いわゆる酒酔い状態、まともに立つことができない、歩くことができない状態で自転車を運転した場合に罰則が適用されましたが、それに至らない、アルコールを保有しているものの酒酔いには至らない酒気帯び状態の場合には罰則がなく、そういった状況については、指導されていた。今後は罰則が整備されますので、検挙の対象となるということです。
- 二点目は、自転車等の安全を確保するための規定の整備ということです。同一方向に進行する自動車等対自転車事故のうち、自転車の右側面が接触部位の事故割合は増加傾向ということでして、これまで義務化されていなかったところでもありますけれども、自動車は自転車等との間隔に応じた安全な速度で進行すること、また、自転車はできる限り道路の左側端に寄って通行することが、新たな義務とされるといった内容でございまして。  
なお、この「安全な速度」ですとか「できる限り」について、どこまで求められるかにつきましては、現時点では詳細を把握しておりませんので、この中身での説明とさせていただきます。
- 最後の三点目は、自転車等に対する交通反則通告制度（青切符）の適用ということです。自転車の交通違反切符については、全国的に増加をみている中で、現行法では、青切符の適用はなく、いわゆる赤切符となり、刑事手続きによって全て処理しておりますので、手続きに長時間がかかります。  
また、違反者にとって、単なる交通違反との認識があるかもしれませんが、現状の制度は、刑事手続きでありますので、起訴され有罪となれば、前科がつく可能性があるところ。  
改正法が施行されれば、自転車についても自動車の違反と同様に、現認が可能で、明白、定型的な違反については、簡易迅速に処理するために交通反則制度を適用することとした内容です。  
要するに、現行では、自転車の違反で検挙された場合、すべて赤切符の刑事手続きで処理しており、警察が違反を認知した場合に、警察で捜査され検察庁へ送致される刑事手続きの流れにのるといったことです。  
一方で、自動車で青切符を作成している信号無視、速度違反等につきましては、青切符により反則の告知を行い、違反者が反則金を納付してしまえばそこで手続きが終了する行

政手続きで終結するところです。

これまで、自転車については、この反則通告制度の行政手続きの適用がなかったところであり、今後二年以内に法が施行されますと、約110罪種程度と言われておりますけれども、現行、自動車でも青切符を適用しているものが、自転車でも青切符が適用され、反則通告制度が適用されるようになります。

なお、現状で酒酔い運転ですとか、青切符ではなく赤切符で処理されているものについては、自転車でも同様に赤切符で処理されるのは変わらないところでございます。

【特定非営利活動法人ポロクル事業運営チームリーダー 田中靖人】

- 事業レポートにてポロクルの近況をご報告しつつ、今年のお取組などお伝えします。  
ポロクルは、札幌市内でシェアサイクルを運営しており、各自好きな「ポート」と呼ばれるステーションから借りて、好きな所に返却できるサービスでございます。  
2023年時点で、自転車550台、ポート57カ所に設置しておりましたが、今年は、自転車600台に増やしており、ポートも60弱まで増えております。
- アプリを使って貸出・返却ができますが、健康という観点で言いますと、消費カロリーが見えたり、走行距離に応じたCO2削減量が表示されたり、年々、進化しております。  
また、ポロクルはドーコンのシステムを使っていて全国で広がっておりますので、旅行、出張に行った際は、同じシステム、アプリを使ってご利用いただける状況でございます。
- 利用回数を見ると、2023年45万回ほどシーズン中の利用があり、今年は、天気にも恵まれていることもあり、50万回くらいの利用が見込まれているところです。  
2019年度以降は電動アシスト付き自転車となっており、GPSによる移動軌跡では、小樽や支笏湖などかなり遠くに行かれる方もいて、様々な形でご利用いただいております。
- 観光という観点から、コロナ禍以降インバウンドの需要が戻ってきており、ホテルや観光案内所での対面での販売に限りませんが、2020年度431件だったものが、昨年度は1,662件まで増えてきております。その他に、コンビニで販売しているパス等もございますので、実数では、これ以上に数字が回復しているところです。
- トピックとして、札幌市が進めている水素エネルギーの利活用に関連して、ポロクルでは、NPO法人エコモビリティサッポロとトヨタ自動車㈱と共同で、水素を動力源とするFCアシスト自転車の開発に取り組んでいます。先日、東京での展示会で発表してまいりました。  
具体的に、いつ街中で走っている様子が見ることができるといふ所まで申し上げることはできないのですが、現在は、実際に自転車が動く段階まで来ております。今後、諸条件がクリアされていけば、街中で走る姿を見ることができるとも思いません。
- ヘルメットの取組に関しては、昨年、北海道と一緒にモニターキャンペーンをやってきましたけれども、今年は、旅行者向けの貸出を継続して行っております。  
また、イオン北海道㈱と共同で、ヘルメット購入に際し、ポロクルの会員証を見せると、店頭で20%ほど割引が受けられるような取組を行っております。

(3) 総評

会議の最後に、本連携会議のアドバイザーである萩原名誉教授より総評をいただいた。

【北海道大学名誉教授 萩原亨】

- この会議は、これまでWeb会議で実施したこともあったが、様々な意見交換ができる場と感じていました。是非、ご出席の皆さまからも個別に「こういう取組をしている」、「こういう取組をしたい」等ご発言、ご発表をしていただけたら、意見交換に集まる価値は生まれてくると思います。

次回は、今年、取り組んでいること、これから取り組んで行かれることなど、一枚くらいにまとめていただいております。それによって、「そんなことやっているのか」、「そういうこともあるのか」など、連携ができるかもしれないので、是非、よろしくお願いいたします。

- ポロクルが面白いなと思ったのは、2019年から赤い電動の自転車に替えて、急に利用者が増えました。「利用のきっかけはよくわからないな」というのを初めて体験しました。赤くなったこと、電動になったことで、急に、「乗ってみたい」となった。実際に、乗ってみると「ラク（楽しい）」と分かった。それによって、昨年使った人が、また、今年も使う。新たに来られた方が、その走っている姿を見て、使うというように相乗効果が生まれ、現在のような利用実態となった。
- 札幌市のまちの中の駐輪をかなり減らしているのではないかと、また、クルマから公共交通機関への乗り換えも増やしているのではないかと思います。自転車で地上を走ってみると美味しそうな店があるなど、札幌市内の路面店をまわってみようかという感じにもなります。まち中において、雰囲気もわかる。地域の活性化に寄与しているのではないかと思います。
- ポロクルの例は、人の気持ちは少しのことで変わり、自転車の利用を促進することを示しています。北海道、札幌、そして他のまちも、ほんの少しのことで、移動手段が自動車から自転車に変わる可能性はあると思いますし、ツアーでも、自転車がメインとなる可能性があるとあります。  
そこに向け作戦を練って、色々なものを導入し、失敗するかもしれませんが、失敗しながら探っていく、うまくいくものを残していくことを、北海道として進めていくことができれば、将来的には非常に良いと思います。
- 「しまなみ」に匹敵するような環境を北海道でもつくっていかれると思いますし、各市町村の移動手段についても、自転車によってもっと快適に移動できるような空間やまちをつくることのできる可能性があるとありますので、是非、関係の方にそんなチャンスをつくっていただくと、地域としてはありがたいのではないかと思います。
- 是非、北海道を中心にして、今後、北海道でそういったことを進めるような情報交換をさせていただけたらと思います。